

〈資料紹介〉中村不折書「皇紀二千六百年記念」

中村孝広

中村不折が皇紀二千六百年を祝って書いた掛軸「皇

紀二千六百年記念」が真筆である根拠を記し、さらに

掛軸を具体的に分析し、結果を記述したものである。

中村不折（一八六六—一九四三）は、明治中期から昭和初期にかけて洋画家として活躍し、さらに書道界においても大きな足跡を残した人物である。

洋画家として出発した不折が書を本格的に研究を始めたのは、一八九五（明治二十八）年三月、日本新聞の日清戦争従軍記者として中国大陸に渡ったことによる。不折はこの渡航を機に中国、朝鮮半島の文物に触れ、その際に「龍門二十品」や「淳化閣帖」などの拓本をはじめ、書道研究に大きく貢献しうる考古学資料を日本に持ち帰った。以来、中国を中心とする東洋の考古学資料を蒐集し、これらの文化遺産を保存・公開すべく、一九三六（昭和十一）年財団法人・書道博物館を設立した。また、不折は蒐集するにとどまらず、蒐集物を研究し、不折自身も書道作品を作っていた。

今回、その中の掛軸（新出資料）を入手した。中村不折が書いたこの掛軸を入手出来た経緯と真筆である根拠を記し、具体的に分析し、分析の結果わかったこと記述する。

この掛軸は、平成二十二年七月六日に山形の骨董屋から購入したものである。購入した時点では鑑定書がなかったため、真筆か偽筆かはつきりしないものであった。購入後、詳細に検討し、落款や表装の状態・文字から判断して真筆であることが明らかとなった。

最初に、この掛軸が、不折の作品に間違いのないという根拠の一つになった印について、真物と比較する。私が入手したものは上段、下段は台東区立書道博物館蔵、中村不折作の李洞詩「送三藏帰西域」（『生誕一四〇年 画家・書家中村不折のすべて展』からのものである。印刷の関係で二つの印の大きさと李洞詩「送三藏帰西域」の印が見難くなっているがご容赦願いたい。

一つ目の印は関防印（引首印とも呼ばれるもの）であり、「長生未央」と刻してある。「長生未央」は「長生きして家が尽きること無し」というお目出度い意味である。

上段の印、下段の印とも「生」と「未」の間のスペースは左側が広い。また、「未」と「央」の間のスペースも左側の縦幅が広い。上段・下段の印ともに同様である。これらの一致点から考えても同じ印と言ってよい。



二つ目の印は氏名印（白文印）であり、「中邨鉦印」と刻されている。中村不折は元々本名を中村鉦太郎という。昭和三年に改名して不折が本名となる。

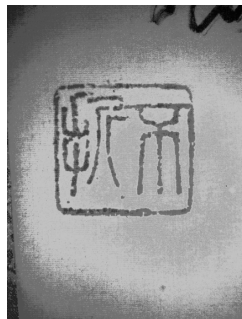
上段の印、下段の印とも「中」と「邨」の右側のスペース部分についてであるが、「中」の右側のスペースは少し余裕があるものの「邨」の右側は、欠けているようでスペースが見られない部分がある。また「中」と「鉦」の上部分のスペースは、中央にはかなり余裕が見られるが、左右にはスペースが少ない。更に、「鉦」の「金」部分は印内から突き出している。「邨」と「印」の下部分はかなり余裕があり、「鉦」と「印」の左側部分のスペースはほとんどなく、ぎりぎりまで文字が迫っている。上段・下段の印ともに同様である。これらの一致点から考えても同じ印と言える。



三つ目の印は雅号印（朱文印）であり、「不折」と刻さ

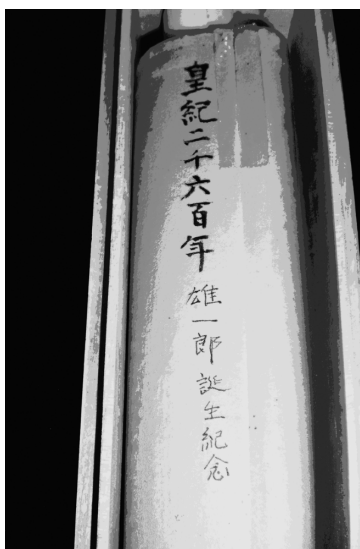
れている。中村不折は前述したように元々本名は中村鉦太郎であり、雅号を不折と名乗った。

上段の印、下段の印とも「不」と「折」がほぼ半分で等分の大きさになっている。また、「不」は上下のスペースが同じ間隔で空いている。「折」は「扌」「斤」とも下部分が大きく欠けた様になっているが、最終部分を少し残しているの、まるで繋がっているように見受けられる特徴も一致する。これらのことから同じ印と言える。

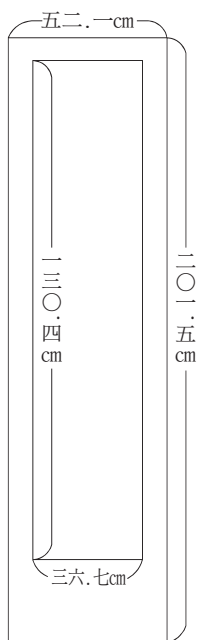


次に裏書について触れておく、この掛軸には、裏に楷書で「皇紀二千六百年 雄一郎誕生記念」と書いてあるが、線の太さが異なっている。また「皇紀二千六百年」は墨で書かれており、書風から言っても不折が書いたものに間違いない。しかしながら、「雄一郎誕生記念」は、万年筆のようなもので書かれた線質であり、明らかに不折の字ではない。よって、「雄一郎誕生記念」に関しては、過去の持

ち主が書いたものであろうと推測できる。



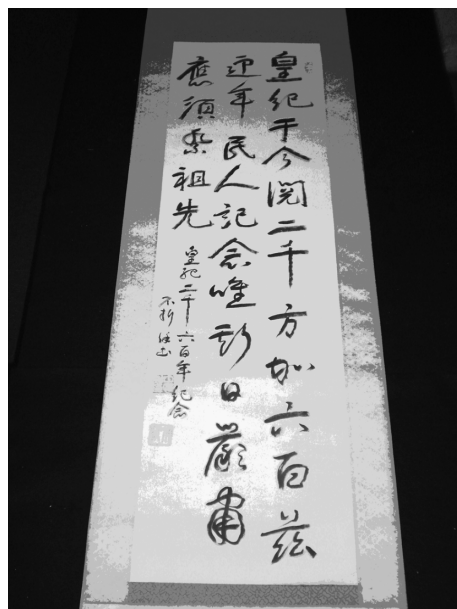
掛軸の寸法であるが、縦幅二〇一・五cm、横幅五二・一cmであり、本文を書いた紙部分は、縦幅一三〇・四cm、横幅三六・七cmである。簡単に図に記す。



掛軸本体は、金色の彩色絹で表装されており、紙部分は絹本である。また軸部分は象牙でできている。掛軸の状態

は決して良好なものとはいえない。上部と下部にはテープ等で補強されている。しかしながら、裏から透かして確認した結果、掛軸の修復箇所は見られない。さらに表装の貼り直しによって見られる特徴（傷んだ部分を少し切り落とすことなど）がみられないことから、表装の貼り替えは行われていないと断定する。したがって、表装も一九四〇（昭和十五）年当時のままである。

書体は行書と草書の行草で書かれており、「龍眠帖」とはまた異なった落ち着いた字に見受けられる。



以下、釈文と訳注を記し、いささか考察を加えることとする。

(釈文)

長生未央

皇紀于今閱二千方加六百茲

迎年民人記念唯斯日嚴肅

應須祭祖先

皇紀二千六百年記念

不折謹書

中 郵
鉦 印

不 折

(訳注)

皇紀今に二千を閱し、方に六百を加ふ。茲に年を迎へ民人記念す。唯斯の日嚴肅にして應に須らく祖先を祭るべし。

墨継ぎについて、墨の滲み・紙への浸透の度合い、また擦れ方から考察する。まず、当然であるがはじめに「皇」で墨を継ぎ、「紀」まで書いたことがわかる。そして「于」で墨を継ぎ書き進め「千」まで書き、また墨を「方」で継ぎ「年」まで書いたことが見てとれる。さらに「民」で墨を継ぎ書き進め「念」まで書き、また墨を「唯」で継ぎ

「肅」まで書いた。最後は「應」で墨を継ぎ最後の「先」まで書いている。落款部分は最初から最後まで一回の墨継ぎで書かれている。

この掛軸は裏書と本文から、皇紀二千六百年を祝うものであることが分かり、内容からしても皇紀二千六百（昭和十五）年に書かれたものであると言える。そのことから計算すると、不折の晩年の作品であり、死去の三年前の作品だとわかる。この掛軸は、中村不折の思想、また当時の社会的出来事（皇紀二千六百年）を物語る資料として価値あるものと認められる。